学業失敗場面での次への切り替えという精神的弾力性の検討

——性格特性や対処様式を基に——

○川原誠司¹ ・ 鈴木美緑^{2, #}

(¹宇都宮大学) (²宇都宮市立泉ヶ丘中学校)

キーワード：失敗、次への切り替え、精神的弾力性

A study on resilience as switching to the next in academic failure: Based on personality trait and coping.

KAWAHARA, Seishi¹

SUZUKI, Minoru^{2, #}

(¹Utsunomiya University)

(²Izumigaoka Junior High School, Utsunomiya City)

Key Words: failure, switching to the next, resilience

目 的

日常生活で失敗を全て避けることは難しい。失敗を起こさない意識と同様、失敗から学ぶことも大事であり、失敗が起きてそれを克服し、次に活かすという精神的弾力性が重要と言える。本稿ではそれを「次への切り替え」と表現する。

次への切り替えの巧拙には個人差があると考えられる。その個人の現状に見合った対応をせず、不適切に働きかけてしまうと、自分を否定しすぎたり、同じ失敗を不用意に繰り返してしまったりする等の悪影響を及ぼす可能性がある。個人差の考慮にあたって、今回は比較的安定的な性格を考える。

本研究は、大学生を対象に失敗場面を呈示し、“性格→失敗直後に生じる感情→生じた感情への対処→次回に向けての具体的な行動→次回の成功期待”といった失敗に関する一連の流れを仮定し、次への切り替えの様相について検討する。

方 法

調査対象者 関東地方にある X 大学の学生 319 名（男子 160 名，女子 159 名）に質問紙調査を実施した。

調査時期 2017 年 10 月中旬～11 月中旬。

調査内容 調査内容は以下のようなものである。

1. 失敗場面：池田・三沢（2012）を参考に、「大学の授業の単位取得失敗」という失敗場面を呈示した。
2. 失敗直後に生じる感情：奈須・堀野（1991）の感情語リストの項目を抜粋し、一部表現を修正して使用した。
3. 生じた感情への対処：神村他（1995）の TAC-24 の情動焦点型対処の項目を抜粋し、一部表現を修正して使用した。
4. 次回に向けての具体的な行動：神村他（1995）の問題焦点型対処の項目を抜粋し、一部表現を修正して使用した。
5. 回目の試験での成功期待：10 段階で評価してもらった。
6. 性格：並川他（2012）の Big Five 尺度短縮版から「情緒不安定性」、「外向性」、「怠惰（誠実性の逆概念）」の 3 つの性格概念の項目を抜粋し、一部表現を修正して使用した。

結 果

尺度構成 前記の 2. 3. 4. 6. については因子分析（最尤法，バリマックス回転）を行い、尺度構成をした。2. については、「自己否定」（5 項目）、「後悔」（3 項目）、「投げやり」（2 項目）の 3 因子であり、3. については、「他者への発散」（2 項目）、「気晴らし」（4 項目）、「棚上げ」（2 項目）の 3 因子であった。4. については、「責任転嫁」（4 項目）、「対人的情報収集」（2 項目）、「計画的準備」（2 項目）であった。6. は当初想定した「情緒不安定」「外向」「怠惰」（4 項目）が得られた。**尺度の因果関係** 目的で示した一連の流れを仮定して、因果として見立て、順序立てて重回帰分析をおこなった。有意なパスが数多く見られたが、主だったものを次に説明する。

最終段階の「回次の成功期待」に直接の影響を与えたものは、「計画的準備」（ $\beta=.28$ ）と「自己否定」（ $\beta=-.25$ ）であり、

その「計画的準備」に影響を与えているのは、「後悔」（ $\beta=.24$ ）と「怠惰」（ $\beta=-.22$ ）、「気晴らし」（ $\beta=.16$ ）であった。

「計画的準備」と同じ水準の「対人的情報収集」については、「他者への発散」（ $\beta=.19$ ）と「気晴らし」（ $\beta=.17$ ）、「怠惰」（ $\beta=-.15$ ）、「後悔」（ $\beta=.12$ ）から影響を受けていた。

「他者への発散」には「外向」（ $\beta=.23$ ）と「情緒不安定」（ $\beta=.18$ ）、「後悔」（ $\beta=.11$ ）が影響し、同水準の「気晴らし」には「外向」（ $\beta=.34$ ）「自己否定」（ $\beta=.19$ ）、「投げやり」（ $\beta=.19$ ）、「怠惰」（ $\beta=.13$ ）が影響していた。

「自己否定」と「後悔」については「情緒不安定」から影響を受けていた（「自己否定」 $\beta=.46$ ；「後悔」 $\beta=.29$ ）。

考 察

「情緒不安定」が「自己否定」に影響を及ぼし、「自己否定」が「回次の成功期待」に負の影響を及ぼしていた。不安を感じやすい人ほど失敗の際に自分評価を下げるだけの危険性がある。そのため、「情緒不安定」が高い人へは否定的側面を過剰に溜めない支援をしないと次への切り替えは困難を来す。

その一方で、「情緒不安定」が「後悔」にも影響を及ぼし、その「後悔」が「計画的準備」に影響し、「回次の成功期待」にも影響を及ぼすことがわかった。「後悔」という感情は「自己否定」とは異なり、「他者への発散」や「対人的情報収集」の対人的要素へつながっており、“うまく後悔できるか”ということが次への切り替えにつながる可能性を示唆している。

「後悔」のような負の感情が改善のエネルギーになる可能性を認識しつつ、「自己否定」の適切な処理を行う必要がある。「気晴らし」や「棚上げ」へ影響が見られるが、それらが良い方向をもたらす用意（例えば、「計画的準備」に繋がる働きかけを加味すること）が次への切り替えに寄与するだろう。

引 用 文 献

- 池田 浩・三沢 良（2012）．失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二（1995）．対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度（TAC-24）の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之（2012）．Big Five 尺度短縮版の開発と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 奈須 正裕・堀野 緑（1991）．原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, 39, 332-340.

付 記

本発表のデータは、第 2 発表者が第 1 発表者の指導で作成した卒業論文による。第 2 発表者の了承を得て、発表資格の都合上、第 1 発表者を責任発表者として発表した。本発表の題名や文章、分析は、第 1 発表者の責において再構成した。